

No.15	提 案 名：魅力溢れるまちなかづくり—住み続けられるまちへ—
	提案団体名：宇都宮共和大学山島ゼミ 2年+都市アメニティ研究会 1年
	所 属：宇都宮共和大学 シティライフ学部
	代 表 者：小林 亮太 指 導 教 員：山島 哲夫
チーム メンバー	小林 亮太 須賀 未樹 小暮 亜衣里 野澤 真奈美 中島 佑輔 石井 介士 中村 万由 熊谷 希 黒川 奈見 小林 春樹 李 東炫

○ 提案の要旨 (Abstract)

宇都宮を「住み続けられるまち (SDGs の 11 番目の目標)」にするためには、まちなかを幅広い年齢層の人々が、楽しめる憩いの場所にする必要がある。

そのため、魅力的なまちといわれているまちを実際に訪れて調査し、宇都宮のまちなかに、何が必要か検討した。

その結果、魅力的なまちは、「まちに変化があり、歩きたくなるまち」、「安心して歩けるまち」、「みどりや自然が豊富なまち」、「自由に憩える場所や休憩できる場所があるまち」であることが確認できた。更に、子育て世帯など多様な人々がまちなかを楽しんでもらうためには、そのためのしつらえがなければならない。

私たちは、こうした観点から、宇都宮のまちなかを魅力的にするために、いくつかの方策を考えた。

1. 提案の背景・目的

宇都宮の中心部には、幅広い年齢層が楽しく憩える場所や歩きたいと思うような場所が少ない。中心市街地の魅力は、まち全体の魅力に繋がり、そのまちに住み続けたいという気持ちを高めると考える。宮祭りやクリテリウム、餃子祭り等のイベント開催時には、宇都宮市民を始め各地から非常に多くの人々が集まる。しかし普段の中心部は、多くの人々が集まれる場所が少ないために、歩いている人が少ない。中でもオリオン通りは、朝や夕方時の登下校の時間帯は多くの学生が通学路に利用し、自転車で走行している。そのため自転車の通行量が多く、歩行者にとって危険である。

また宇都宮市の人口はこれまで増加してきたものの、昨年 18 年ぶりに減少してしまった。今後は、人口減少や少子高齢化が急速に進行すると予測されている。更に、パルコの閉店に伴い中心市街地の魅力低下が懸念されている。

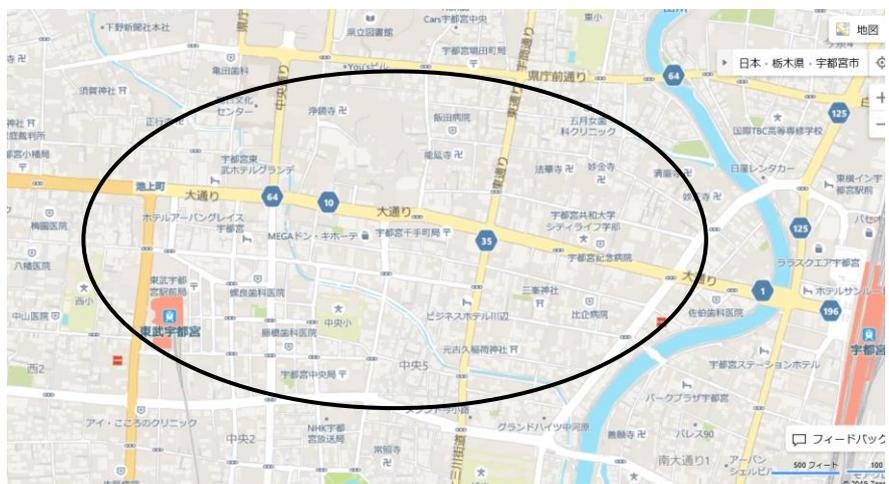


図 1 宇都宮中心部(google マップに加工)

そこで私達は、宇都宮中

心部に若者から高齢者・子育て世帯等多様な人々が楽しく憩え、歩きたくなるような街にすることにより、宇都宮を住み続けられるまちにすべきではないかと考えた。今回の提案では、宇都宮の中心部の範囲を概ね図の枠内として、検討を行った。

2. 提案の目標・SDGs との関連

SDGs（持続可能な開発目標）で掲げられている 17 の目標のうち、「11 住み続けられるまちづくりを」という目標があり、「包括的で安全かつレジリエントで持続可能な都市及び人間居住を実現する」としている。この中に「女性、子ども、高齢者及び障害者を含め、人々に安全で包括的かつ利用が容易な緑地や公共スペースへの普遍的アクセスを提供する」というターゲットも掲げられている。

私たちは、SDGs の「住み続けられるまちづくりを」という目標に着目し、かつ、ターゲットに掲げられた、多様な人々を対象に考える、という点を考慮し、

- ◇ 住み続けられるまちにするためには、中心市街地が魅力的でなければならない
 - ◇ 老若男女、子育て世帯など多様な人々が安心して楽しめるまちなかでなければならない
- と考え、宇都宮のまちなかに何が必要か検討した。

また、宇都宮市の第 6 次総合計画では、将来の都市像を「輝く人の和 つながるまちの環 魅力と夢の輪」として人・地域・つながり・産業など様々な視点でまちづくりに取り組むと記載されている。そこで、6 次総の 6 つの分野別計画の中から「子育て・教育」「安全・安心」についても、今回の提案で取り上げることにする。

- ◇ 子育て出来る環境・支援の整備
- ◇ 安全に配慮され安心して暮らせる

提案の目標は、宇都宮の中心部を魅力溢れるものとし、賑わいをもたらすことにより、宇都宮市が住み続けられるまちにすることである。

3. 現状分析

宇都宮のまちなかの状況を、魅力的な他都市のまちとの比較で検討した。比較するために実際に調査して歩いたまちは、東京の吉祥寺、神楽坂、東京丸の内、仙台市中心部の 4 か所である（なお、このうち東京地区の調査は、今夏（8 月）に行った）。また、チームメンバーが実際に訪れたことのあるまちも参考にした。これらのまちと宇都宮との違いを踏まえるとともに、SDGs の「住み続けられるまちづくりを」という目標に照らして、必要となる機能等にも着目して宇都宮の現状の問題点を分析した。

3.1 魅力的なまちなかとは

住み続けられるまちとするためには、中心市街地が魅力的でなければならない。魅力的なまちなかに、人々が集まってくる。どのようなまちであれば、人々が集まってくるのか、それは

- ・歩きやすいまち・歩きたくなるまち そこに行きたくなるまち
- ・居心地のいい場所があるまち そこに滞在したくなるまち
- ・賑わいのあるまち 人は人がいるところに集まる

である。

（1）宇都宮のまちなかの状況

歩きやすいまちとなるためには、文字通り、バリアや凹凸などがなく、クルマや自転車などを気にせず、安心して自由に散策できなければならない。また、気分良く歩くためには、歩きながら、まちが変化していくことが必要である。人は、変化のない道を歩くと、実際に歩いた時間よりも長く感じ、疲れやすいといわれている。

宇都宮の現状を見ると、写真に見るように、物理的な意味でも、バリアフリーになっていないところが見かけられる。また、オリオン通りなどを猛スピードで走る自転車の存在など、安心して散策できる環境ができていない。さらに、中心商店街が一本道で、しかも変化が少ない。



図2 歩きづらい道（釜川沿いと日の町通り）及びオリオン通りの自転車

また、宇都宮の中心市街地の空き店舗は減少してきているものの、2019年11月現在24軒の空き店舗があり（宇都宮市中心市街地空き店舗情報システム https://www.d-sokko.co.jp/u_akitenpo/index.php）、この改善も必要である。



図3 宇都宮中心部の空き店舗

(2) 吉祥寺（東京）

吉祥寺は、曲がり角が日本一多いまちであり、賑やかなアーケード街に様々な雰囲気のある横丁が多数交わっている。まちを歩いていて、変化が楽しめ、長く歩いても疲れにくい。角を曲がると、違う姿があらわれてくる。アーケード街には空き店舗はなく、しかも、人が滞在する喫茶店などは2階部分が、飲食店なども地階部分などが使われている。



図4 アーケード街と井の頭公園

また、吉祥寺駅の南側には、井の頭公園があり、ゆっくりと休むこともできる。井の頭公園までの道にも、用品店や飲食店が並んでおり、独特の雰囲気醸し出している。もちろん、アーケード街に自転車は走っていない。アーケード街の中は、各店舗の冷房による冷風で、真夏の暑い日であったが比較的しのぎやすかった。

まちなかには、分かりやすいマップがあり、商店街全体の姿が確認できるようになっていた。



図5 様々な表情を見せる吉祥寺の横丁（路地）

（3）神楽坂（東京）

神楽坂はまちのメインの通りが坂になっている。坂は、同じ場所であっても上りの風景と下りの風景が異なって見えるという利点がある。メインの通りから、路地に入ると、かくれんぼ横丁、芸者小道、兵庫横丁など名前が付いた通りがあり、それぞれ違った雰囲気を味わうことができる。それぞれの横丁には、料亭だけでなく、喫茶店のような、普通に入れる店もある。

神楽坂というメインの通りの周り一帯が、人々が散歩できるエリアとなっている。坂の中腹には善國寺というお寺があり、少し歩くと、ラカグという商業施設もある。私たちが訪れたときは、真夏の暑い日であったが、下の写真（左）のように所々にミストが出ており、暑さ対策も講じられていた。



図6 神楽坂・中央の写真はかくれんぼ横丁

（4）東京丸の内

丸の内は、日本一のオフィス街であるが、まちの中は、ビジネスとは関係ない多くの来訪者で溢れている。丸の内地区は、エリアマネジメントが行われており、地域全体として歩きたくなるまちとなっている。メインの丸の内中通りには立派な街路樹があり、モニュメントも置かれ、さらに、空きスペースや道の至る所に人々が自由に休めるベンチがある。人がちょっと座りたいと思う工夫が凝らされている。私たちが訪れた時も、多くの人々が、ベンチに座り、楽しんでいた。周りは、超高層のビル街であり、上層部分は事務所になっているが、1,2階部分等の低層部は、喫茶店やレストラン、ブランドショップなどとなっている。丸ビルや新丸ビルをはじめとして、多くの超高層ビルでは、5階から6階までをショッピングやレストラン、喫茶店としており、イベントをできる空間も用意されている。人々はビルに入ったり、街路を散歩したり、自由気ままに過ごすことができる。また、下の右の写真に見られるように、中通りは、ほぼ一面ミストが出ており、暑い中であったが、心地よく歩くことができた。休日には多くの観光客が訪れる場所で

あり、まちをめぐる遊覧バスも運行されている。丸の内は、緑豊かな心地よい街路が存在し、自由に休める多くの休憩場所があり、ビルの中にも人々が楽しめる仕掛けがある。



図7 丸の内の街路と三菱一号館の広場（中央の写真）

（5）仙台

まちの中心部に、仙台駅前から続く6つのアーケード街がある。6つのアーケード街はそれぞれに特徴があり、店の構成や雰囲気も異なっており、どのアーケード街も非常に歩きやすく活気があり、私たちが訪れたときは、空き店舗を見つけることができなかった。

アーケード街の先には緑豊かな定禅寺通りがあり、市民の憩いの場となっており、様々なイベントも行われている。下のアーケード街の写真は、ウイークデイの昼間に撮影したものであるが、様々な世代の多くの人々がまちなかを出歩いていた。アーケード街以外の街路（定禅寺通り以外の街路も）にも、緑豊かな街路樹が植えられており、気分良く歩くことができる。更に、緑が取り入れられているアーケード街も存在している。

アーケード街の道はきれいで歩きやすく、自転車が走っている姿は一切見かけなかった。



図8 仙台のアーケード街



図9 定禅寺通りと緑豊かな一般街路

(6) 魅力的なまちなか

ここまで述べてきた、魅力的なまちなかの特徴をあげると、

- ◇ 空き店舗などがなく、まちに変化があり、歩きたくなるまちである
- ◇ 物理的にも整備されており、自転車なども気にしないで安心して歩ける
- ◇ 自由に憩える場所や、緑や自然が豊富である
- ◇ 豊富な緑やミストなどにより、夏にも快適に過ごせる

これは、初めに述べた「歩きやすいまち・歩きたくなるまち」であり、「居心地のいい場所があるまち」であり、「人で賑わっているまち」ということになる。

3.2 多様な人々が楽しめるまち

住み続けられるまちにするためには、まちなかが多様な世代が楽しめるようになっていなければならない。多様な世代としては、子ども、若者、大人世代、高齢者、子育て世帯、更に車いす利用者などが考えられるが、ここでは、高齢者と子育て世帯に着目する。

宇都宮のまちなかでは、高齢者や子育て世帯が楽しく散策しているのを見かけることが少ない。ベビーカーや車いすで移動している姿を見かけることもほとんどない。まちなかの道は、人々の移動のためだけのスペースではなく、人々が歩き回り、立ち止まり、佇むことのできるスペースでなければならない。

郊外のショッピングセンター、ベルモールやインターパークなどでは、ベビーカーを押す人や小さな子ども連れを多く見かける。郊外のショッピングセンターは、子育て世帯や高齢者は、重要な顧客であり、ショッピングセンター全体で、こうした顧客を受け入れる体制が整備されているからである。託児スペースや子どもの遊び場などがあり、高齢者が休める場所なども整備されている。

個々の店で構成されているまちなかでは、このようなスペースを用意することが難しい。前節で取りあげた東京のまちなどは、ショッピングセンターのような施設があるわけではないが、まちの至る所に休める場所があり、緑がある。

まちなかに、ほっとできる休憩場所や、子どもを安心して遊ばせたり、一時預かりできるような場所があれば、多様な世帯がまちなかを楽しめる。

3.3 パルコの跡について

宇都宮のまちなかでは、その中心的な施設の一つであったパルコが閉店した。私たちは、このパルコの跡をどのように使うかが、まちなかの活性化に重要であると考え、メンバーが手分けして、30人（市内12人、市外18人）にヒアリングを試みた。

その結果、ヒアリング対象者の3分の2の20人から、映画館が欲しいとの声があった。その理由として、宇都宮の映画館のある大型ショッピング施設まで行くことが困難であり、宇都宮中心街にできれば行きたいと話す。ヒアリング調査の中の若者は、勉強スペースやカフェなどがあればよいと話す。これらを踏まえて、私たち自身がパルコ跡地に欲しいものを話し合った結果、以下のものが挙がった。

- ・映画館
- ・プラネタリウム
- ・託児所
- ・アスレチック（高齢者用・子ども用）
- 図書館
- ・フードコート
- ・レストラン・飲食店
- ・勉強スペース
- ・図書館
- ・大学
- など

これらは、パルコ活用の一例であり、現実的でないものも含まれているが、パルコの跡は、宇都宮のまちなかの中心を占めており、このままにしておくべきではなく、暫定的にでも中心市街地に不足している用途に活用することで、宇都宮のまちなか全体の活性化につながる考えられる。

4. 施策事業の提案

宇都宮のまちなかを、人々が安心して楽しめる場所とするために、「安心して気分よく歩けるまち」、「開かれた空間や休憩スペースのあるまち」、「子育て世帯など多様な人々への配慮」の3項目について、具体的な施策の提案を行う。

4.1 安心して気分良く歩けるまち

安心して気分良く歩くためには、「道の構造自体が安全」で「自転車等に通行を妨げられないこと」、「外部の環境に対してそれを緩和する仕組みがあること」、「まちが単調でないこと」が必要である。

(1) 安全な道

安全な道は、物理的に凹凸や、メクレなどが無いことは当然の前提であるが、宇都宮の独自の問題として、中心市街地を猛スピードで走る自転車の存在がある。オリオン通りでは、押しチャリを推奨しているが、これを守る人はほとんどいない。特に、下校時には大量の自転車が横並びで走っている。こうした状況を変えなければ、安心して歩くことができない。

自転車に対する対策として、押しチャリの徹底が必要である。現在、オリオン通りに設置されている押しチャリの看板は、目立たないうえに誰も意識していない。まず手始めに、押しチャリの看板を大きくし、いやでも目に付くようにする。これはマナーの問題でもあり、意識したからと言って、守られるとは限らない。

そこで、人々を押しチャリへとつなげるための工夫として、例えば、路面に自転車で走っていくと、穴に落ちてしまう、というようにトリックアートを描くというのも面白いと思う。

時間を限って、自転車の通行止めをする。この場合、オリオン通りの中に、自転車止めを数か所設け、そのまま走っていけないような工夫も考えられる。更に、車両のスピード制限を行う（例えば時速5km）ことや、通行止めにする、という社会実験等を行うことも有効である。要は、歩道では自転車を降りなければならないという意識を醸成することである。

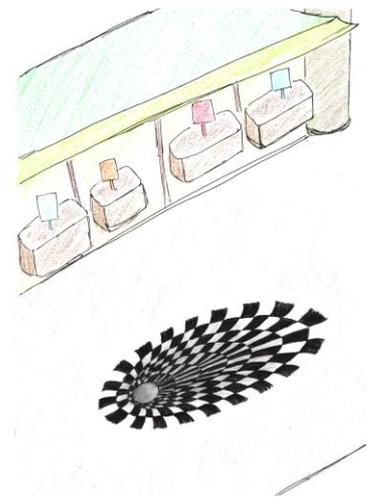


図9 トリックアートの例(中村万由)

(2) 外部環境の緩和

今年の夏に訪れた東京のまちはいずれも、暑さ対策が行われていた。丸の内も神楽坂もミストがあり、次に、外部の環境に影響されずに快適に過ごすための工夫を考える。特に夏の暑さ対策が重要である。丸の内では中央通り全体にミスト装置が置かれ、神楽坂では人が多く集まる場所などにミストがあった。吉祥寺もアーケード街は各店の冷房の冷気で、涼しく感じる事ができた。更に、道路自体に大きく育った街路樹があつて心地よい日陰が形成されていたり、緑豊かな公園などもある。

・ミスト発生装置の設置

ミスト（ドライミスト：ミストに触れても濡れない）の発生装置は、現在多くの都市で設置されており、オリオン通りなどに設置すべきと考える。ミストは、冷却効果だけでなく、防臭・抗菌効果、防塵効果などもあるといわれている。



図10 道路に設置されたミスト装置（大阪の例）
(<http://atamatote.blog119.fc2.com/blog-entry-582.html>)

- ・樹木等による木陰の形成

宇都宮のまちなかには、大きな街路樹が少なく、気持ちの良い木陰が多くない。しかし、宇都宮の街路樹を仙台のように増やすことは困難である。現在、釜川沿いには素晴らしい緑があるので、これを散策の際の木陰として利用しやすいように整備することは可能と考える。

また、釜川沿いにある駐車場などのオープンスペースに人が集まれる広場をつくり、そこに緑を植えたり、パラソル風の簡単な覆いなどで日陰ができるように工夫すれば、外部環境の影響を緩和することにつながると思われる。

(3) 変化の多いまち

今回調査したまちは、どのまちも、歩いていて疲れないうち（＝飽きないまち）であった。これは、まちが単調ではなく変化が多く、歩いていると常に新しい発見があることが背景にある。どのまちも、単純な一本道ではなく、まちに広がりがあり回遊することができる。それに対して、オリオン通りは一本道で、しかも周辺地域とのつながりが少ない。通りに交わる道は一部を除いて、単なる裏道になってしまっている。そのため、まちが単調で変化が少なく、まちを回遊する人はほとんどいない。

そこで、釜川沿いに様々な施設をつくったり、城址公園とのつながりを深めること（十分な幅員の歩道のある道路の整備）により中心市街地の面的な回遊性を高めることができると考える。

4.2 広場や休憩スペースのあるまち

まちには、人々が落ち着いてくつろげるスペースが必要である。人が休めるスペースとしては、喫茶店などもあるが、屋外で誰でも自由に、好きな時にくつろげる開かれたスペースの存在が必要である。今回調査したまちでは、まちの至る所に、人が気楽に気分よく休める場所があるところが多かった。吉祥寺では、大規模な公園がすぐ近くにあり、木陰の中でゆったり過ごすことができる。

宇都宮のまちなかにも、オリオンスクエアやバンバ広場などのオープンスペースがあるが、これらは、イベント時の利用に適しているが、人々が気楽に憩える場所ではない。これらの場所で飲食している人を見かけることも少ない。広場は、広すぎてかえって落ち着かないのである。広い広場では、人は、広場の端に寄ってしまい、中央部分は空いてしまう。そこで、オリオン通り周辺の駐車場スペースや釜川沿いのスペースの利用が考えられる。釜川沿いには、写真に見るようなコインパーキングなどが点在している。こうしたスペースを次ページのイラストで示したような心地よい広場として整備すれば、人々を引き付けることが可能になる。このようなスペースをネットワーク化することにより、更に魅力が向上すると思われる。

宇都宮の西側にやがてLRTが延伸されてくる。そうすると、現在ある駐車場のスペースがこのまま維持できなくなる可能性が高い。LRT整備後を見据えて、まちなかのスペースの活用方法は今から検討しておくべきことと考える。



図 11 釜川沿いのオープンスペース(駐車場)



図 12 釜川上に設けられた休憩スペース

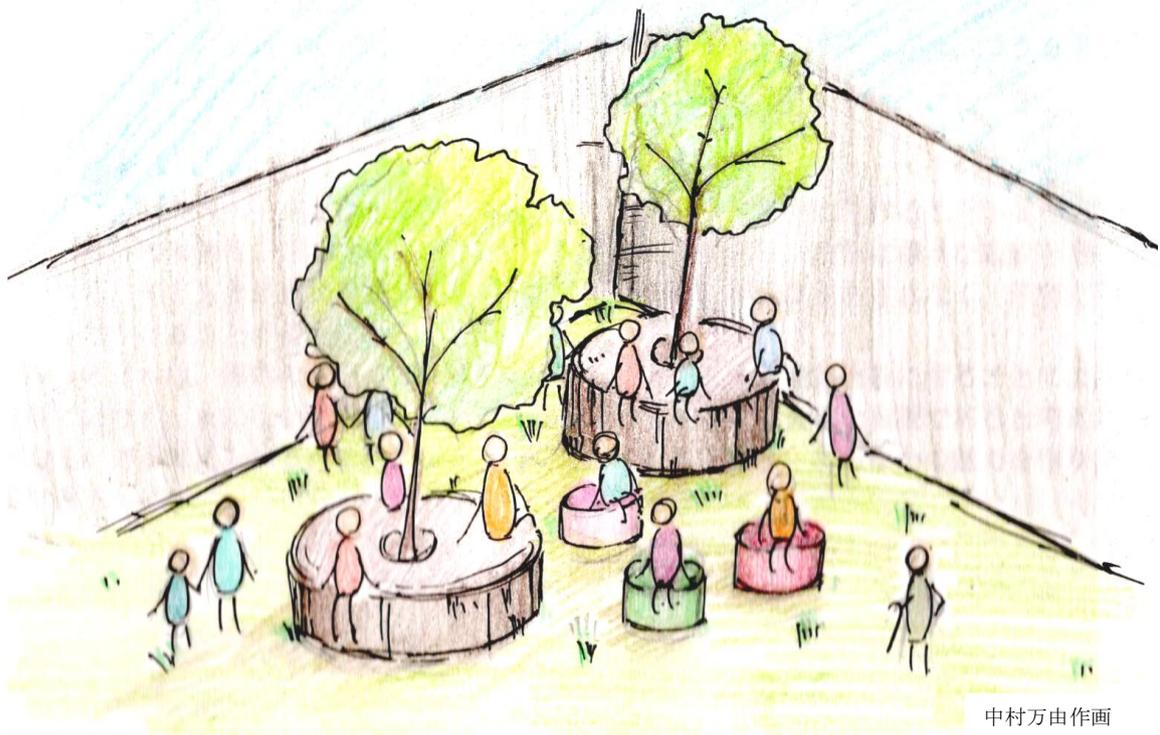


図 13 居心地の良い広場のイメージ

4.3 多様な人々が集えるまち

まちは人がいるところである。人は人がいるところに集まるといわれている。人がいなければ、如何に景観がよくとも、それは心地よいまちとは言えない。多様な人がいれば、多くの人を引き付けることができる。

まちを利用する人、まちを楽しむ人は、その人の属性や年齢により大きく異なっている。まちなかを楽しむ人で、最もハードルが高いのは、小さな子ども（子育て世帯）と高齢者・障害者である。

また、子育て世帯一つとっても、子どもの年齢、子どもの数により必要とする施設やまちの在り方も異なるし、母親が働いているかどうかによっても異なってくる。

しかし、多様な人々の中で、ハードルが高いと思われる人々が、まちを楽しむことができれば、全ての人がそのまち楽しめるであろう。

高齢者や障害者がまちを楽しめるようにするためには、まちのバリアフリー化と適切な休憩場所の存在が必要である。4. 1や4. 2で述べたように、まち自体が楽しい場所になれば、高齢者等もまちなかを楽しめるようになると思われる。

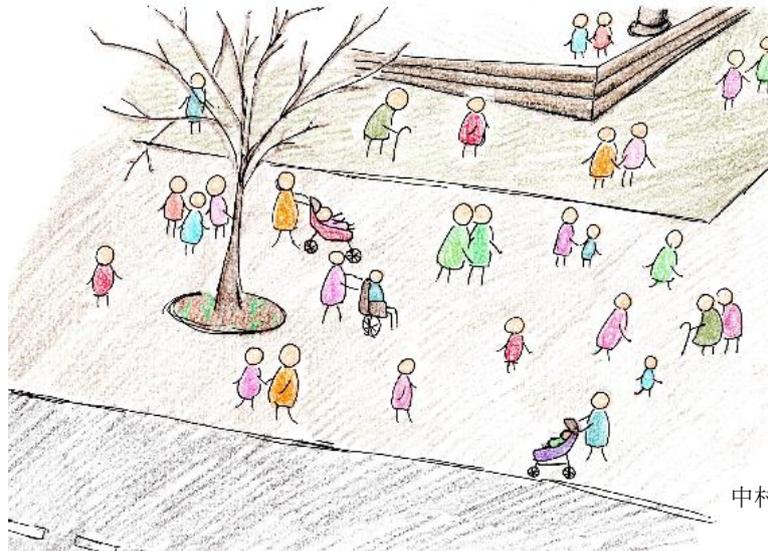
そこでここでは、最もハードルが高いと考えられる、子育て世帯に着目して、まちなかに何が必要か考えてみる。

ヒアリングを行った子育て世帯は、子供を遊ばせる場所・預けられる場所に悩んでいる方が多かった。宇都宮市内には、12か所の子育てサロンがあるが、休日は休館日となっており、休みの日に、子育てサロンに子ども預けてまちなかに出てくるという行動はとれない。まちなかに、子どもと一緒に楽しめるキッズニアのような場所や保育士さんなどがいる店舗や飲食店、子どもを一時的預かってもらえる場所などがあれば、まちなかに出てきやすくなる。

郊外ショッピングセンターでは、子どものための施設が整備されている。その結果、子育て世帯も、出かけていきやすい。中心市街地にも、こうした施設があれば、出かけやすくなる。

そこで、私たちは、まちなかに、子どもと子育て世帯、高齢者、若者など多様な世代が活動できる空間をつくることを提案する。

高齢者にとっては、多様な世代と交流することによる共生ケアの状態が出来上がり、若者にとっても、子どもとの交流は教育的にも良い影響を与えると考える。多世代が交流できる場を用意することにより、様々な人々がまちなかを楽しむことができる。



中村万由作画

図 14 多様な世代が集うまちなか

パルコの活用

子どものためのスペースを作る場所については、パルコのビル内に設けることが最も適切と考える。パルコの建物は、宇都宮中心部のシンボリックな存在であり、内部に様々な施設を設けることができる。子どもと多世代が交流できる場所を設ければ、天候に左右されなく、子育て世帯もいつでも出かけることが可能になる。

パルコのビルは、郊外のショッピングセンターなどに対抗する商業施設にすることにより再生するのではなく、まちなかに不足している機能・用途を充足する貴重な施設であると考えれば、様々な使い方が考えられる。東京丸の内では、ビルと街路が相乗効果を高めていたように、宇都宮のまちなかも回遊性が高まり、魅力を高めることができる。また、まちなかに不足している機能をパルコの建物に取り込むことにより、建物の活用の幅が広がり、建物自体の活性化につながる。



<https://www.shimotsuke.co.jp/articles/ga>

図 15 パルコの利用イメージ